

インターネットによる MSM の HIV 感染予防に関する行動疫学研究 - REACH Online -

研究分担者：嶋根 卓也（国立精神・神経医療研究センター）

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部）

研究要旨

わが国のエイズ対策における個別施策層である Men who have Sex with Men (MSM) の HIV 感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにし、HIV 感染に関する予防啓発を行うことを目的に、インターネットを活用した実態調査および予防的介入を行った。Secure Socket Layer (SSL) によって保護された研究用 Web サイトに無記名自記式質問票、啓発コンテンツを掲載し、MSM 向けのインターネットサイトやアプリケーションソフトウェアを通じて対象者を募集した。各研究年度の研究成果により以下の結論が得られた。

【1年目】計 10,442 名より有効回答が得られた。コンドーム常用率が低い若年者をターゲットとしたコンドーム使用を促す予防的介入や、HIV 抗体検査受検率の低い若年者や地方在住者をターゲットとした HIV 検査受検を促す介入が必要である。また、MSM 同士の出会いの場がゲイタウンからインターネットにシフトしている可能性が示唆されることから、介入の手段としてインターネットを活用することが有効と考えられる。同時に、性感染症診療に関わる医療者に対しては、性的指向を打ち明けられた際の対応や、セイファーセックスを阻害する可能性のある薬物使用に対する理解を深めることが求められる。

【2年目】計 9,857 名より有効回答が得られた。HIV 検査未受検者の背景として、「忙しい」、「面倒くさい」のように日々の生活に追われ、検査に行く時間を確保しづらい状況にある可能性が示唆される一方で、「怖い」、「知りたくない」のように自身の健康に向き合うことを意識的に（あるいは無意識に）避けている可能性も示唆される。また、検査未受検者の受検行動を促進するためには、未受検者の周囲にいる友人・恋人を通じて働きかけていくことが受検行動につながる可能性がある。また、ゲイタウン利用率の低下を踏まえれば、MSM 向けに開発された SNS やアプリケーションソフトウェアなど MSM にとって身近なツールを活用することが、検査未受検者に情報を正しく伝える上で有効かも知れない。一方、性交時における脱法ドラッグ使用や、使用に伴うコンドーム使用率の低下がみられたことから、脱法ドラッグが新たなセックスドラッグとなり、HIV 感染リスクを高めている可能性がある。

【3年目】計 11,559 名より閲覧前の有効回答が得られ、このうち 8,295 名が「セイファーセックス編」、6,324 名が「脱法ドラッグ編」、4,990 名が「HIV 検査編」を閲覧後の有効回答を得た。啓発コンテンツ閲覧前後に、コンドーム使用に対する態度、HIV 予防に対する態度、薬物問題の相談に関する知識、HIV 受検に対する態度に大幅な改善がみられた。

以上より、インターネットを通じた MSM の HIV 感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにし、HIV 感染に関する予防啓発を行うことで、普段ゲイタウンを利用しない多く MSM の実態を掴み、HIV 感染予防に関する知識や態度を変容させることに成功したと結論づけられる。

A . 研究目的

厚生労働省エイズ動向委員会によれば、全 HIV 感染者報告数の 72%は男性同性間の性的接触を感染経路とするものであり、東京、大阪、名古屋の三大都市を含む地域からの報告数が多数を占めるという。MSM(Men who have sex with Men、以下 MSM と表記) はエイズ対策における個別施策層として位置づけられており、MSM 向けの予防対策が重視されてきた。

一方、MSM には可視化されにくい接近困難層 (hard to reach population) という側面があり、主として MSM コミュニティ (いわゆる都市部におけるゲイタウン) において情報提供や予防的介入が行われてきた。しかし、筆者らのこれまでの調査によれば、ゲイタウンにおけるゲイバーやハッテン場といった施設の利用率は減少傾向にあることが示されている。したがって、ゲイタウンにおける情報提供や予防的介入だけでは、MSM 向けのエイズ対策は十分とは言えない状況にある。

MSM 向けの施設利用率が低下した背景には、MSM 同士の出会いの場がコミュニティから、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (いわゆる SNS)、スマートフォンを中心としたアプリケーションソフトウェア (いわゆる、アプリ) といったインターネットメディアへのシフトが影響している可能性が考えられる。こうした MSM を取り巻く環境の変化を踏まえると、インターネットを通じた実態調査や予防介入ができれば、ゲイタウンに登場しない MSM 層も含めた HIV 感染予防行動の動向把握と、その関連要因を明らかにすることや、HIV 感染予防に必要な情報を届けることができると期待される。

【1 年目】MSM における HIV 感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにすることを目的に、インターネットによる実態調査を行う (REACH Online 2011)。近年のインターネットを取り巻く環境の変化を考慮し、

従来のパソコン用調査サイト (PC 版) に加え、携帯電話やスマートフォンなど携帯端末からのアクセス (モバイル版) にも対応可能な調査システムを構築する。平成 23 年度は、MSM 向け施設の利用状況、性行動、コンドーム使用状況、HIV 抗体検査受検状況、性交時の薬物使用状況、性感染症の罹患状況、診療の場における性的指向の開示など幅広く調査する。

【2 年目】平成 23 年度同様に MSM における HIV 感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにすることを目的に、インターネットによる実態調査を行う (REACH Online 2012)。スマートフォン利用者の急増を考慮に入れ、2 年目は携帯端末のみで情報収集を試みる。MSM の HIV 検査行動のさらなる促進が必要であること、改正エイズ予防指針において薬物乱用者が個別施策層として位置づけられたことを踏まえ、平成 24 年度は、MSM における HIV 抗体検査行動の阻害要因、および薬物使用が HIV 感染リスクに与える影響を重点的に調べる。

【3 年目】平成 23 ~ 24 年度の調査で得られた知見を基に、HIV 感染予防に関する啓発コンテンツ (セイファーセックス編、脱法ドラッグ編、HIV 検査編) を作成し、インターネットによる MSM に対する HIV 感染の予防的介入を試みる (REACH Online 2013)。介入による知識や態度の変化を検討することで、インターネットによる HIV 感染予防の可能性を考える。

B . 研究方法

1 年目は平成 23 年 8 月 22 日から平成 24 年 1 月 31 日まで、2 年目は平成 24 年 8 月 27 日から平成 25 年 1 月 31 日まで、3 年目は、平成 25 年 9 月 17 日 ~ 11 月 30 日まで、Secure Socket Layer (SSL) で保護された研究用 Web サイトに無記名自記式質問票、啓発コンテンツ (平成 25 年度) を掲載し、研究を実

施した。

対象者は、MSM 向けのインターネットサイト上のバナー広告、アプリケーションソフトウェア、フリーペーパー、雑誌、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) などを通じて募集した。

インターネット調査 (介入) を実施する上で重要なことの一つはセキュリティの確保である。本研究で用いた調査研究専用のホームページは、Hypertext Transfer Protocol (HTTP) を Secure Socket Layer (SSL) で保護することによって、研究参加者が回答したデータを暗号化してサーバに送信、情報漏洩防止策とした。

サイトの構築、収集データの際には、File Transfer Protocol (FTP) での接続を許可し、主に SSL で保護した FTP over SSL (FTPS) で暗号化してサーバに接続を行う。ただし、開発元でも管理者 ID を発行して ID 保持者のみがサーバへアクセス可能なように制限した。

インターネットとサーバの間にサービス提供内のプロトコル以外で不正なパケットの転送がないよう Firewall で適切なブロックを行った。

研究に用いたサーバは Redundant Array of Inexpensive Disks (RAID) 機能を有しており、不測の事態によりサーバのディスクが停止した場合も代替ディスクによりシステムが正常に稼動するように配慮した。なお、サーバが設置されている建物へのアクセスは厳重な入室管理チェックによってセキュリティが保たれている。

消火設備にはハロゲン消火装置が設置され、その他にも、EIA 規格の 19 インチラックの使用、電源系統の多重化、センター内のバッテリー、非常用発電機設備、精密な空調管理と耐震設備により安全な運用を行った。サーバの稼動状況を監視するため、サーバの URL に対して HTTP リクエストを定期的に送信し、その応答をチェックした。応答がない場

合には、監視者に警告メールが送信されるよう配した。

(倫理面への配慮)

調査実施時には、研究参加者にオンライン型のインフォームドコンセントによって研究目的や方法について事前に説明し、承諾を得た後に質問票回答に進むシステムを採用した。また、回答途中であっても回答を取りやめることが可能であること、研究者とは電子メールを通じて常時連絡がとれることを付記した。なお、本研究実施にあたり、宝塚大学看護学部研究倫理委員会の承認を受けた。

C. 研究結果

主たる知見は以下の通りである。

【1年目】

1. 有効回答数は、PC 版 3,685 名、モバイル版 6,757 名、計 10,442 名であり、対象者は年齢 20~30 代、都市部在住者、単身生活者、大学卒業以上の高学歴者が多かった。
2. 2008 年調査と比較して、「ゲイバー」や「ハッテン場」などのゲイ向け施設の利用率が低下する一方で、ゲイ向けに開発されたアプリ (スマートフォン等にインストールして利用するアプリケーションソフトウェア) を通じて男性と出会い、セックスに至っている。
3. 対象者の 85% 以上が過去 6 ヶ月間にセックス経験があり、セックス経験者のうち 70% 以上がアナルセックスを行っていた。セックスの相手は「その場限りの相手」が最も多かった。
4. 不特定相手とのセックス機会が多い一方で、コンドーム常用率は 30% 程度 (PC 版 31.1%、モバイル版 32.9%) であり、特に 10 代の常用率が低く (PC 版 25.8%、モバイル版 21.0%) HIV を含む性感染症リスクがより高い可能性がある。
5. 覚せい剤、ラッシュ (亜硝酸アミル)

MDMA などの薬物がセックスドラッグとして使われている可能性がある。

6. MSM に対する HIV 感染予防プログラムへの曝露は、HIV 予防関連団体 (NGO) が設置されている都道府県の在住者においては良好であり、地域に根ざした活動が行われていることが示唆される。
7. 過去 1 年間における HIV 抗体検査受検率は、PC 版 23.4%、モバイル版 24.4%であった。10 代の受検率が低く (PC 版 7.1%、モバイル版 11.1%) 都市部在住者の受検率が高かった。HIV 抗体検査受検歴 (過去 1 年間) を有する群は検査歴の無い群に比べ、性感染症に関する知識が豊富であり、コンドーム購入率が高く、ゲイ向け施設 (ハッテン場など) の利用率が高いことから、性的活動性が高いと同時に、自身の健康への意識も高い群と言えるかもしれない。
8. 診断歴のある性感染症としては、梅毒が最も高く (PC 版 6.1%、モバイル版 7.3%)、クラミジア (PC 版 5.8%、モバイル版 5.5%)、B 型肝炎 (PC 版 4.6%、モバイル版 4.7%)、HIV (PC 版 4.2%、モバイル版 4.1%) と続き、全体的に都市部で高い傾向がみられた。
9. 性感染症診療の場で、自身の性的指向について話した経験を有する者は、わずか 9.7%であり、10代 (1.8%) や 20代 (6.4%) においてはさらに低かった。自身の性的指向について話せたとしても、医療者の対応を「差別や偏見のある対応」と感じている対象者も少なくない。

【2 年目】

1. 有効回答数は 9,857 名であり、平均年齢は 30.0 歳、居住地は全都道府県に分布、スマートフォンからの回答 73%であった。
2. 対象者の 54.6%が検査生涯未受検歴群 (これまでに一度も HIV 抗体検査の受検歴がない者) であり、過去 1 年以内受検

群 (過去 1 年以内に HIV 抗体検査を受検した者) は 22.4%であった。

3. 検査未受検者がこれまでに HIV 抗体検査を受検しなかった主な理由として、「忙しく、時間がないから (33.4%)」、「検査に行くのが面倒くさいから (29.8%)」、「陽性結果が出たら怖いから (23.3%)」、「自分の HIV 感染の状況を知りたくないから (14.2%)」が挙げられた。
4. 検査未受検者の特徴として、HIV/AIDS に関するメディア曝露が低く、MSM における流行認識が低く、MSM 同士で話題になる機会も少ないことが明らかになった。
5. 検査未受検者は、「彼氏・パートナー (64.1%)」や「MSM の友達 (35.8%)」といった身近な存在に HIV 抗体検査をすすめられたいことが明らかになった。
6. コンドーム非常用群は、コンドーム常用群と比べ、性交時の薬物使用割合が高かった。覚せい剤や 5-MeO-DIPT のような規制薬物のみならず、脱法ドラッグ (ハーブ等) も性交時の薬物使用割合がコンドーム非常用群において高かった。また、薬物を一緒に使用する相手としては「ゲイの友人・知人 (58.8%)」が最も多く、薬物の使用場所としては「ホテル・ラブホテル (46.6%)」が最も多かった。

【3 年目】

1. 啓発コンテンツ閲覧前の事前アンケートの有効回答数は計 11,559 名であり、平均年齢 31.2 歳、居住地は全都道府県に分布していた。事前アンケートに回答した 11,559 名のうち、8,295 名が「セーフターセックス編」、6,324 名が「脱法ドラッグ編」、4,990 名が「HIV 検査編」を閲覧した上で事後アンケートにも回答した。
2. 「セックスの相手にコンドームの使用を促す効果的な台詞を思いつくか？」という問いに対して、閲覧前に「思いつく」と回答した対象者のうち、96.0%は閲覧後

も「思いつく」のままであった。一方、「思いつかない」と回答した対象者のうち54.3%が、閲覧後には「思いつく」に変化した。

3. 「HIV 予防を心がけようと思うか？」という問いに対して、閲覧前に「そう思う」と回答した対象者のうち、98.3%は閲覧後も「そう思う」のままであった。一方、「そう思わない」と回答した対象者のうち50.7%が、閲覧後には「そう思う」に変化した。
4. 「全国の精神保健福祉センターで薬物相談が無料で受けられることを知っていますか？」という問いに対して、閲覧前に「知っている」と回答した対象者のうち、85.5%は閲覧後も「知っている」のままであった。一方、「知らない」と回答した対象者のうち47.4%が、閲覧後には「知っている」に変化した。
5. 「今後、HIV 検査を受けようと考えていますか？」という問いに対して、閲覧前に「受ける意志あり」と回答した対象者のうち、96.0%は閲覧後も「受ける意志あり」のままであった。一方、「受ける意志なし」と回答した対象者のうち43.7%が、閲覧後には「受ける意志あり」に変化した。

D . 考察

【1年目】

コンドーム常用率が低い若年者をターゲットとしたコンドーム使用を促す予防的介入や、HIV 抗体検査受検率の低い若年者や地方在住者をターゲットとした HIV 検査受検を促す介入が必要である。

また、MSM 同士の出会いの場がゲイタウンからインターネットにシフトしている可能性が示唆されることから、介入の手段としてインターネットを活用することが有効と考えられる。同時に、性感染症診療に関わる医療

者に対しては、性的指向を打ち明けられた際の対応や、セイファーセックスを阻害する可能性のある薬物使用に対する理解を深めることが求められる。

【2年目】

HIV 検査未受検者の背景として、「忙しい」、「面倒くさい」のように日々の生活に追われ、検査に行く時間を確保しづらい状況にある可能性が示唆される一方で、「怖い」、「知りたくない」のように自身の健康に向き合うことを意識的に（あるいは無意識に）避けている可能性も示唆される。また、検査未受検者の受検行動を促進するためには、未受検者の周囲にいる友人・恋人を通じて働きかけていくことが受検行動につながる可能性がある。また、ゲイタウン利用率の低下を踏まえれば、MSM 向けに開発された SNS やアプリケーションソフトウェアなど MSM にとって身近なツールを活用することが、検査未受検者に情報を正しく伝える上で有効かも知れない。

一方、性交時における脱法ドラッグ使用や、使用に伴うコンドーム使用率の低下がみられたことから、脱法ドラッグが新たなセックスドラッグとなり、HIV 感染リスクを高めている可能性がある。薬物を使用する MSM に対しては、エイズ対策と薬物依存対策の両面から捉えるべきであり、その予防・治療・ケアにあたっては専門領域の枠を超えたより包括的な対応や連携が求められる。

【3年目】

インターネットを活用した HIV 感染予防の啓発を行い、約2ヶ月半という短期間にも関わらず、1万人を超える MSM にエビデンスに基づく情報を伝えることができた。インターネットを通じた予防啓発や情報提供は、人を介した活動に比べて低コストである上に、普段ゲイタウンを利用しない MSM に対しても介入効果が期待できるという特徴がある。啓発コンテンツ閲覧前後に、コンドーム使用に対する態度、HIV 予防に対する態度、薬物

問題の相談に関する知識、HIV 受検に対する態度に大幅な改善がみられた。

E . 結論

インターネットを通じた MSM の HIV 感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにし、HIV 感染に関する予防啓発を行うことで、普段ゲイタウンを利用しない多く MSM の実態を掴み、HIV 感染予防に関する知識や態度を変容させることに成功したと結論づけられる。

F . 研究発表

1. 論文

(英文)

- 1) Shimane T, Hidaka Y, Wada K, Funada M. Ecstasy (3,4-methylenedioxymethamphetamine) use among Japanese rave population, *Psychiatry and Clinical Neurosciences*. 67:12-19,2013.
- 2) Shimane T, Matsumoto T, Wada K. Prevention of overlapping prescriptions of psychotropic drugs by community pharmacists. *Jpn. J. Alcohol& Drug Dependence*, 47(5):202-210, 2012.
- 3) Wada, K., Funada, M., Matsumoto, T., Shimane, T.: Current status of substance abuse and HIV infection in Japan. *Journal of Food and Drug Analysis*, 21(4):33-36, 2013.

(和文)

- 1) 嶋根卓也：思春期における薬物乱用の実態と対策，産婦人科治療 103(2),144-150,2011.
- 2) 嶋根卓也：思春期における薬物乱用の実態と予防，思春期学 29(1),13-18,2011.
- 3) 嶋根卓也：薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する

研究、埼玉県薬剤師会雑誌,37(8)、17-21,2011.

- 4) 嶋根卓也：薬剤師から見た向精神薬の過量服薬,精神科治療学 27(1),87-93,2012.
- 5) 松本俊彦、嶋根卓也、尾崎茂、小林桜児、和田清：乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み、精神医学 54(2);201-209,2012.
- 6) 嶋根卓也．薬物依存における新たな動向 -多様化する乱用薬物．精神医学．54(11):1119-1126, 2012．
- 7) 日高庸晴、嶋根卓也．【自己破壊的行動多角的理解のために】性的指向の理解と専門職による支援の必要性．精神療法．38(3):350-356, 2012.
- 8) 嶋根卓也．医者や薬局のくすりなら大丈夫？中高生のためのメンタル系サバイバルガイド（松本俊彦＝編）．日本評論社、東京.74-79, 2012.
- 9) 松本俊彦、成瀬暢也、梅野 充、青山久美、小林桜児、嶋根卓也、森田展彰、和田清: Benzodiazepines 使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の特徴に関する研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 47 (6): 317-330, 2012.
- 10) 嶋根卓也、日高庸晴.薬物使用障害と性的マイノリティ, HIV. 物質使用障害とアディクション臨床ハンドブック .精神科治療学 . 28 : 289-293. 2013.
- 11) 嶋根卓也. ゲートキーパーとしての薬剤師,医薬品の薬物乱用・依存への対応 . YAKUGAKUZASSHI . 133 : 617-630 . 2013.
- 12) 嶋根卓也. 薬剤師からみたくすり漬け問題,くすりにたよらない精神医学(井原裕、松本俊彦＝編).日本評論社. 35-39, 2013.
- 13) 嶋根卓也,日高庸晴. 性的マイノリティと薬物乱用・依存の関係 . 依存と嗜癮

- どう理解し、どう対処するか (和田清 = 編). 医学書院. 115-126, 2013.
- 14) 嶋根卓也. 一般用医薬品のインターネット販売解禁が及ぼす乱用・依存症の危険性. 大阪保険医雑誌. 41: 13-16, 2013.
 - 15) 嶋根卓也. ゲートキーパーとしての薬剤師, うつ病パーフェクトガイド. 「調剤と情報」19: 36-37, 2013.
 - 16) 嶋根卓也. 薬剤師から見た「処方薬を適切に使えない患者たち」, うつ病パーフェクトガイド. 「調剤と情報」19: 126-130, 2013.
 - 17) 嶋根卓也. 脱法ドラッグを使う若者たち. 東京都こころの健康だより 107:6, 2013.
 - 18) 嶋根卓也: ゲートキーパー研修会の報告. 埼玉県薬剤師会雑誌, 40 (2), 6-8, 2014.
2. 学会発表
(国内)
- 1) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田 清: 薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011. 10. 15.
 - 2) 松本俊彦, 嶋根卓也, 尾崎 茂, 小林桜児, 和田 清: 乱用・依存の危険性の高いベンゾジアゼピン系薬剤同定の試み: 文献的対照群を用いた予備的研究. 平成 23 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 名古屋, 2011. 10. 15.
 - 3) 嶋根卓也, 日高庸晴: クラブカルチャーとの親和性と MDMA 使用との関連. 第 70 回日本公衆衛生学会総会, 秋田, 2011.10.19-21.
 - 4) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田清: 調剤レセプトを通じて把握された向精神薬の重複処方の実態について, 第 17 回埼玉県薬剤師会学術大会, 埼玉, 2011.11.6.
 - 5) 嶋根卓也: 薬剤師を真の"ゲートキーパー"とするために 薬剤師が潜在的な精神科疾患や過量投与、自殺をピックアップできるようにするためにはどうすることが必要か、向精神薬乱用・依存の予防に薬局薬剤師はどのように関われるか. 日本薬学会第 132 年会、北海道、2012.3.28-31.
 - 6) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田清: 向精神薬乱用を疑う患者に関する疑義照会・情報提供を薬剤師が積極的にできない背景. 第 47 回日本アルコール・薬物医学会. 北海道. 2012.9.7-9.
 - 7) 嶋根卓也: 若手シンポジウムアルコール・薬物研究の未来に向けて-薬剤師と薬物依存-. 第 47 回日本アルコール・薬物医学会. 北海道. 2012.9.7-9.
 - 8) 松本俊彦, 成瀬暢也, 梅野充, 青山久美, 小林桜児, 嶋根卓也, 森田展彰, 和田清: Benzodiazepines 使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の特徴に関する研究. 第 47 回日本アルコール・薬物医学会. 北海道. 2012.9.7-9.
 - 9) 岸本桂子, 嶋根卓也: カリキュラム・教材からみた薬学教育における薬物、医薬品乱用・依存、日本社会薬学会第 31 年会、三重、2012.9.15-16.
 - 10) 嶋根卓也, 日高庸晴: クラブ内の個室利用とアルコール・薬物使用との関連性. 第 71 回日本公衆衛生学会総会. 山口. 2012.10.24-26.
 - 11) 松崎良美, 嶋根卓也, 三砂ちづる: 若年女性の自傷経験とその受容-20 代女性への聞き取り調査より-. 第 71 回日本公衆衛生学会総会. 山口. 2012.10.24-26.
 - 12) 嶋根卓也, 松本俊彦, 和田清: 処方医への「つなぎ」としての疑義照会 - ゲートキーパーとしての職能を発揮するために -. 第 18 回埼玉県薬剤師会学術大会. 埼玉. 2012.11.11.
 - 13) 嶋根卓也, 日高庸晴: MSM におけるアル

- コール影響下でのセックスと覚せい剤使用との関連-インターネット調査の結果より-. 第 26 回日本エイズ学会学術集会. 神奈川. 2012.11.24-26.
- 14) 日高庸晴, 嶋根卓也: 全国インターネット調査 REACH Online 2011 から示される自傷行為経験と HIV 感染予防行動の関連. 第 26 回日本エイズ学会学術集会. 神奈川. 2012.11.24-26.
- 15) 嶋根卓也: ゲートキーパーとしての薬剤師と処方薬乱用・依存、医薬品の乱用・依存に薬剤師はどうかかわれるか. 日本薬学会第 133 年会、神奈川、2013.3.27-30.
- 16) 和田 清、船田正彦、嶋根卓也、松本俊彦. 脱法ドラッグを含む薬物の乱用・依存・中毒. 北海道薬剤師会学校薬剤師部会. 第 60 回北海道薬学大会、札幌. 2013.5.18-19 .
- 17) 和田 清、船田正彦、嶋根卓也、松本俊彦. 薬物の乱用・依存・中毒と脱法ドラッグ. 日本法中毒学会第 32 年会、千葉. 2013.7.5-6.
- 18) 嶋根卓也、和田清、日高庸晴、船田正彦. 脱法ドラッグ使用による主観的症状と形状の関係 クラブユーザー調査より . 平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会 合同総会、岡山. 2013.10.3-5.
- 19) 嶋根卓也、日高庸晴、和田清、船田正彦. クラブにおける薬物乱用の実態、シンポジウム 8 薬物乱用の動向とその防止策. 平成 25 年度アルコール・薬物依存関連学会 合同総会、岡山. 2013.10.3-5.
- 20) 三田村俊宏、嶋根卓也、阿部真也、吉町昌子、後藤輝明、宮本法子. 薬剤師と自殺予防～“つなぎ”の現状からゲートキーパーとしての薬剤師の役割を考える～. 日本社会薬学会第 32 年会、東京、2013.10.13-14.
- 21) 嶋根卓也、宮野廣美、川崎裕子、膳亀昭三、金子伸行. 過量服薬防止に重点をおいたゲートキーパー研修を通じて薬剤師の職能を考える. 第 19 回埼玉県薬剤師会学術大会、埼玉、2013.11.10.
- 22) 嶋根卓也、日高庸晴. MSM における脱法ドラッグ使用がコンドーム使用に与える影響 インターネット調査より . 第 27 回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2013.11.20-22.
- (国外)
- 1) Shimane T, Hidaka Y, Wada K, Funada M: Problematic behavior and MDMA use among Japanese rave populations, 74th Annual Meeting - College on Problems of Drug Dependence, Palm Springs, CA(USA),2012.6.9-14.
- 2) Shimane T, Hidaka Y: Alcohol and methamphetamine use during sex among Japanese men who have sex with men recruited through the Internet, 9th National Harm reduction conference, Portland, Oregon(USA), 2012.11.15-18.
- 3) Wada K, Funada M, Shimane T: Current status of substance abuse and HIV in Japan, The 2013 International Conference on Global Health: Prevention and Treatment of Substance Use Disorders and HIV (Taiwan), 2013.4.17-19.
- 4) Shimane T, Hidaka Y, Wada K, Funada M: Patterns and settings of 3, 4-methylenedioxymethamphetamine (MDMA) use at dance parties in Japan, CPDD 75th Annual Scientific Meeting, San Diego, CA(USA), 2013.6.15-20.